

歴史の社会学的解釈：前編

平川 幸雄

1. はじめに：何が問題か

本稿で私が語ろうとするのは、歴史を社会学的に解釈できるのか、あるいは社会学的に説明できるのか、という問題である。

もし歴史を社会学的に解釈することが可能ならば、どのような社会学の発想や方法が用いられ、どのような社会学的概念が用いられているのか。歴史の社会学的説明はどの程度に実り豊かな成果をもたらしているのであろうか。私は歴史学の巨匠のテキストに即して、こうした問題を発掘し、この問題解明に挑戦してみようと思う。

ここで検討の対象とするテキストは、きわめて限られたものである。20世紀歴史学の巨匠たちの作品群の中から、いわゆる「社会史」と目される著作を選定してみた。彼ら歴史学の巨匠の作品の中から、どのような「社会学」が発掘できるのか、そして解読できるのか。それが問題である。

20世紀歴史学といっても多岐にわたる。私は、便宜、次のように大きく時期区分して、以下の叙述を進めたいと思う。すなわち、現代フランス歴史学の泰斗フェルナン・ブローデル Braudel, Fernand (1902-85) を中点に、第一にブローデル以前、第二にブローデルの時代、第三にブローデル以後、という三つの区分をとることとした⁽¹⁾。

第一の時期は、「新しい歴史学」の創始者、リュシアン・フェーヴル Febvre, Lucien (1878-1956) とマルク・ブロック Bloch, Marc (1886-1944) の活躍した時期に当たっている⁽²⁾。ここでは特にマルク・ブロックに焦点を当て、そのテク

ストを検討しつつ、デュルケム社会学と歴史学との相互交流を語りたい。マルク・ブロックの歴史学は、今日の日から見れば、草創期の歴史社会学の名に値する。

第二の時期は、フェルナン・ブローデル自身が活躍した時期である。ここではブローデルの著『地中海』（初版 1946、第2版 1966）⁽³⁾ で展開される「歴史の時間」と「全体史」の構想を見ていくことにしよう。その際、ブローデルが社会学と歴史学の関係をどのように見ていたかは重要な問題であるが、ブローデルは社会学に好意的な態度を持っていなかったように見受けられる。それと同時に、ブローデルの歴史学自体にも限界があったことを指摘したい。

第三の時期は、歴史学の帝王と渾名されたブローデルへの批判、反動の時期である。そうしたブローデル批判の中から、社会学的=人類学的色彩を濃厚に帯びた歴史学が現れる。

一人は、『モンタイユー』（1975）⁽⁴⁾ の著者ル・ロワ・ラデュリ Le Roy Ladurie, Emmanuel (1929-) である。ル・ロワ・ラデュリは、南仏のカタリ派異端の村、モンタイユー Montailou という小さい村の一つを微細に研究することによってマイクロヒストリー micro-history（微視的歴史）への道を開いた。

彼は、あたかも参加観察者が村の調査をするように、600年前の異端審問史料の山に分け入り、文献史料の中で丹念に「フィールドワーク」を行い、村人の生活や村人が交わす日常会話を再現する。彼が好んで用いるキーワードは「ソシアビリ

テ」sociabilité, sociability (社会的結合、社交、つきあい)である。

もう一人注目すべき歴史学者はプリンストンのロバート・ダーントン Darnton, Robert (1939-)である。ダーントンは、フランス歴史学に顕著に見られる数量史的分析の方法に批判の眼を向け、徹底してケーススタディにこだわる。そのケースとは、ヌーシャテル印刷出版協会 STN: Société Typographique de Neuchatel に保管されている文献史料である。

この史料によってダーントンは、アンシアン・レジーム期の出版産業、書籍の取引と流通、出版者と著作者との駆け引き、読者層の知られざる実態を、あたかも掘り出し物の逸品を発見したような語り口で克明に描き出す。

ダーントンはオクスフォードに留学していた頃、ヌーシャテル文書館に一通の問い合わせの手紙を出した。その返信が、偶然にも、この宝の山ともいべき膨大な史料の発見につながったのである。

ダーントンは膨大な史料の森の中から、動いている人間をキャッチし、それを「素描」sketchingする。その素描の背後には彼の膨大な史料の「読み」がある。彼の歴史叙述の魅力は、史料の読みからサスペンスに満ちた「語り」narrativeを紡ぎ出し、「厚い記述」thick descriptionをすることにある。それは物語的歴史の復活・再生の試みと読むこともできよう。だが、それだけではない。ダーントンの試みの中に、われわれは思想の社会史 social history of ideasの新しい冒険を見ることができるのである。彼のキーワードは「コミュニケーション・プロセス」communication processであり、執拗に追求する課題はアンシアン・レジーム期における「世論形成」opinion formationであるといつてよい⁽⁵⁾。

この「はじめに」において、さしあたり、以下の論述を追う際に役立つと思われる巨匠たちの言葉を引用しておこう。

まずリュシアン・フェーヴルに登場願おう。
—「歴史を研究するためには、決然と過去に背

を向け、まず生きなさい。歴史家よ、地理学者でありなさい。同じく法学者、社会学者、心理学者でありなさい」。「歴史とは人間の科学である。問題提起の「歴史」histoire-problèmeをわれわれに与えよ」⁽⁶⁾。

次に登場するのはマルク・ブロックである。
—「歴史は何よりもまず、変化の科学である。きわめて遠い過去をわれわれに一層近い時代の光によって照らさなければならない。かつてデュルケム Durkheim, Émile (1858-1917) は家族に関する講義の冒頭で言った。「現在を知るためには、まずあとを振り返らなければならない」。賛成である。しかし、過去を解釈するために、まず注目すべきものは現在である。歴史は逆に読まなければならない」⁽⁷⁾。

フェルナン・ブローデルの言葉を聞こう。—「私がここで社会学というとき、今世紀はじめエミール・デュルケムとフランソワ・シミアン Simiand, François (1873-1935) がこの言葉から作り出そうとした総合科学のことを意味している。社会学者と歴史学者との間の対話は、ほとんどいつも噛み合わない。社会学者は歴史の時間から逃げる。彼らは現在としての瞬間に逃げ込むか、反復という現象の中に逃げ込む。調査技術の上辺だけの観察は信用しないほうがよい」⁽⁸⁾。

ところが、ル・ロワ・ラデュリは、社会的=人類学的方法を用いていることを次のように述べている。—「(南仏オクシタンの)モンタイユー村の研究を始めたとき、ぼくはちょうど人類学のフィールドワークのようなつもりだったのです。何度もモンタイユー村に足を運びました。民俗学者が村人から聞き取りをやるように、歴史家は過去の文書から聞き取りをやるわけです。ぼく自身といえば、手がかりとしたのは、シカゴ学派の仕事です。村レベルの最初のモノグラフを書いたロバート・レッドフィールド Redfield, Robert (1897-1958)の仕事です」。「歴史学の学問的言説は再び質的テキストへの関心を深めています」。「(歴史学が)手を結ぶ相手としてはどの学問分野

を選ぶかという点では、社会学と人類学の間に大きな違いはありません。デュルケムはほくらにとって、マルセル・モース Mauss, Marcel (1872-1950) と同様に大切です⁽⁹⁾。

プリンストンの歴史学者ダントンの場合は、ル・ロワ・ラデュリよりも、さらに社会学に接近する。インタビュアーに答えて彼は大要、次のように述べている。——「ヌーシャテル印刷出版文書 Publishers' Papers in the Neuchatel Archives はフランス史やヨーロッパ史のような類の歴史にとって重要なのではなく、コミュニケーション史 history of communications に大いに関係するのです。フランスやドイツでは「書物の歴史」 *histoire du livre*, *Geschichte des Buchwesens* が発展してきていますが、それは書物を超えて、コミュニケーション・プロセス全体に広がってゆくべきものです。それは、世論はいかに形成されたかという問題でもあります。われわれは、頂点にそびえ立つフィロゾフの思想史 *intellectual history* でなく、思想の社会史ともいべき分野の広い分野を切り開いています。思想の社会史は、哲学的というよりは社会学的 *sociological* なのです⁽¹⁰⁾。

本論に入る前に、少しだけ補足しておきたいことがある。それは、ブローデルの著名な作品『地中海』に関してである。わが国フランス史学の先達、井上幸治教授のブローデルについての感想をここに引くのは決して無駄ではない。——「ブローデルは日本のフランス史研究からみると、なかなかじめない歴史家であった。読み始めたものの、ページをめくると、まず地中海世界を規定する部分に驚いた。フェリペ二世どころではないと思って、放棄してしまった⁽¹¹⁾。

ブローデルの『地中海』を含めて、歴史学の著作はすべて物語の歴史であることを要請される。だが『地中海』は、読者を寄せつけない読みにくい物語である。なぜか。その原因を探れば、ブローデルの「ほとんど動かない環境—緩慢なリズムで動く諸集団—短く急な揺れを持つ出来事」、「構

造—変動局面—事件」という歴史の三層構造、ならびに「地理的な時間—社会的な時間—個人の時間」という歴史の時間把握が説得的でないからであろう。彼のいう「全体史」 *total history* の構想や「歴史の時間」 *historical time* の把握に対して、読者はいちいち疑問を抱き、先を読み進む意欲が殺がれてしまうのである。

ブローデルの『地中海』は出版当初、売れる本ではなかった。読みにくく、時間をかけて読んでも面白くない、というのが大方の読者の反応であった。それに比べると、ル・ロワ・ラデュリの『モンタイユ』は世界各国で多くの読者を獲得した。「新しい歴史学」とは何か、という疑問に対して、現地を案内してくれるように答えてくれる。『モンタイユ』は面白い物語だから、受け入れられたのである。この両者の違いの中に、実は本稿で論じる大きな問題が隠されているように思われる。

世代が替わり、学問の質が変わった。歴史学の問題意識は広がりを見せ、社会学=人類学の方法を取り入れるようになってきた。ル・ロワ・ラデュリの歴史学は歴史民族学 *ethnohistoire* と呼ばれることもあるが、彼は、その間の事情を率直に次のように述べている。——「社会科学の中で、ほくらにとって有益な学者となると、マルクス Marx, Karl (1818-83)、マックス・ウェーバー Weber, Max (1864-1920)、フロイト Freud, Sigmund (1856-1939) はもちろんですが、テンニース Tönnies, Ferdinand (1855-1936)、デュルケム、ヴァン・ジェネップ Van Gennep, Arnold (1873-1957)、モース、新しくはレヴィ=ストロース Lévi-Strauss, Claude (1908-) ということになるでしょう。歴史家に役立つたくさんのアイディアをそこに見出すことができます。実を言って、歴史家はアイディアに乏しいのです。ほくらは禿鷹のような存在なのです。たとえば、今ほくらはリーチ Leach, Edmund R. (1910-89)、ヴィクター・ターナー Turner, Victor W. (1920-83) やギアツ Geertz, Clifford (1926-) と

いった人のことを念頭に置いているのです」⁽¹²⁾。

ブローデルに対する批判以後、歴史学の禿鷹が狙いをつけているものは、おおよそ次の三つの標的であると思われる。第一は社会学=人類学への転回である。第二は政治史への回帰である。そして第三に物語的歴史の復活・再生であろう⁽¹³⁾。

2. 「新しい歴史学」の創始者：リュシアン・フェーヴルとマルク・ブロック

1918年11月第一次大戦が終結した。ドイツと連合国との休戦協定にともない、独仏の政治的境界に位置する都市、ストラスブールは40年以上を経て、フランスの統治に復帰した。シュトラスブルク・カイザー・ヴィルヘルム大学はフランス当局により閉鎖され、1919年秋、ストラスブール大学は人事・組織を一新して開校する⁽¹⁴⁾。

リュシアン・フェーヴルは、このストラスブール大学の同僚にして後輩のマルク・ブロックとの交友を回想し、レジスタンス運動に加わってドイツ軍に射殺されたブロックの不遇な死(1944)を悼み、友情に溢れる美しい文章を残している(1945)。——「マルク・ブロックと私がストラスブールで会ったのは、たしか1920年10月だと思う、あの学部の始業式の一つでだった。情熱的なフランス人——そう、われわれはそれを四年の間武器を手にして証明した。われわれがこれからなろうと望んでいたのは、引き裂かれたアルザスのために仕える召使いであった」。

——「面識のない者が自己紹介し合った。われわれは進んで相手の前に歩み寄った。選ばれた者同士が、友情と献身を固く誓い合った」。

——「1886年リヨンに生まれたマルク・ブロックは、われわれの中で最年少の一人であった。私には、彼はとても若く見えた。40歳の男の目には、32歳といえば若僧である」。

——「大学では、われわれの演習室は目と鼻の先といってよいほど隣り合っていた。しかもドアがいつも開いていた。学生たちは二つの演習室の間

を往き来した。ブロックと私はしばしば連れ立って宿舎へ帰った」⁽¹⁵⁾。

歴史学者としてブロックは、自己を模索していた。どの方面に進むべきかを依然決めかねていた。手はじめに彼は短い学位論文『国王と農奴——カペー史の一章』(1920)⁽¹⁶⁾を仕上げ、ソルボンヌにこれを提出して学位を授与された。この学位論文においてブロックは、心理社会史 psycho-history という新しい分野を開拓する第一歩を踏み出したのである。

すでにブロックは「歴史家の仕事=職人技」historian's craft について考察をめぐらしており、特にデュルケム社会学に傾倒した「社会学者」として制度 institution の問題、すなわち制度の背後に存在する人間たちをつかみ取ろうと追求していた⁽¹⁷⁾。ノートの断片を綴り合わせた遺著『歴史のための弁明』(1949)でブロックは、次のように述べている。——「風景の目につく特徴の背後に、道具あるいは機械の背後に、きわめて形式的に見える文書の背後に、また創設者とは全くかけ離れているように見える制度の背後には、人間たちがいる。歴史がつかみ取ろうと追求するのは、そうした背後にいる人間たちである」⁽¹⁸⁾。

デュルケムの集合意識 conscience collective、集合表象 représentation collectives に触発されていたブロックは、歴史における集合信仰 croyance collective についての問題に対し、強い関心を抱いた。医師の兄ルイ・コンスタン・ブロック Bloch, Louis Constans (1879-1922) から示唆を得て、集合信仰のアイディアが生まれた。それは「医師たる王」という長期にわたって信じられた民間信仰ないし民間伝承 folklore に関するものである。これは『奇跡を行う王』(1924)⁽¹⁹⁾の問題として展開され、若きブロックの旺盛な好奇心を満たすに足る十分なテーマであった。今日、マルク・ブロックの『奇跡を行う王』は宗教政治史、心性史 histoire des mentalités を開拓した先駆的業績とみなされているが、むしろそれをはるかに超えて、集合表象を媒介にして政治史と思想史と

を繋ぐ歴史社会学の偉大な貢献と見なければならぬ。

リュシアン・フェーヴルとの雑談と意見交換の中で、ブロックは、宗教政治史というよりは経済史へ、経済史というよりは社会史 *histoire sociale*, *social history* へと徐々に新しい地平を切り開いていった。

ブロックには、デュルケムの影響ほどではないが、構想力豊かな地理学者ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ Vidal de la Blache, Paul (1843-1918) の影響を受けた著作がある。ブロックがオスロの比較文明研究所で行った一連の講義をまとめた『フランス農村史の基本性格』(1931)⁽²⁰⁾がそれである。ここでブロックは「何がフランス農村史の基本性格なのか」について、比較文明的視点から次のように解答する。——フランスには三つの農業文明が混在・並存している。それが「基本性格」であるというのである。

この著作にとりかかったとき、ブロックは地籍簿や土地区画図などの図面を利用する。その解説の手がかりは、たしかに地理学的方法が与えてくれたものであろう。しかしながら、「比較」の視点を駆使し、農業技術と農業慣習の組合せを「農業文明」と捉え、これを「社会類型」に分けて、フランス農業文明について統合した視点を提示し、さらに歴史を現在から読む「廻行的＝逆行的方法」を用いているのは、明らかにデュルケム社会学の経済社会史 *histoire économique et sociale* への巧みな適用である⁽²¹⁾。

リュシアン・フェーヴルはいう。——「ストラスプールのあの(1920年代から)1930年代は、実に美しい時代であった。熱がこもり、無私無欲でしかも多産な仕事の、美しい時代であった。何と多くの友情があったことか！ このころシャルル・ブロンデルがわれわれの時代の偉大な書物の一冊、あの傑作『集合心理学序説』(1928)⁽²²⁾を書いた。あの精神はわれわれのものだった」⁽²³⁾。

ストラスプールの文学部における「土曜の会」は1920年に始まった。もともとは言語学と宗教

史の研究者の間で持たれていた、土曜日午後に開かれる非公式の集まりであった。やがて歴史学や社会学の人たちがこれに加わって、会はややフォーマルなかたちになった。それは、自分自身の研究を発表するか、自分たちの専門分野の最近の著作を批評する会に発展する。会は活発な討論の場となった。中世史学の権威、ベルギーのアンリ・ピレンヌ Pirenne, Henri (1862-1935) も、旅の途中で、ここに立ち寄って参加することがあった。こうした学際的な集いを通して、ブロックは年長・同輩の教授たちを知るようになった。

参加者の顔ぶれは、社会心理学のシャルル・ブロンデル Blondel, Charles (1876-1939)、集合的記憶で知られる社会学のモーリス・アルヴァクス Halbwachs, Maurice (1877-1945)、宗教社会学のガブリエル・ルブラ Le Bras, Gabriel (1891-1970) などであり、とりわけ近代史の先輩教授リュシアン・フェーヴルであった⁽²⁴⁾。

フランス革命史家ジョルジュ・ルフェーヴル Lefebvre, Georges (1874-1959) が1928年から37年までストラスプールの教鞭をとり、彼らの仲間に加わった。彼は集合心性 *mentalité collective* に関心を寄せていたが、その彼に『1789年の大恐怖』(1932)⁽²⁵⁾や『革命的群衆』(1932)⁽²⁶⁾に関する研究を思いつかせたのは、マルク・ブロックがそれ以前に、すでに王権と民間伝承との関係、すなわち『奇跡を行う王』の研究を行っており、その影響を受けたからにはほかならない。フェーヴルはいう。——「ジョルジュ・ルフェーヴルがストラスプールの学部を迎えられた。ブロックと私は大喜びした。歴史家グループの生活と活動が何であれ、われわれは学部に関心をもっていなかった」⁽²⁷⁾。

リュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックが毎日のように顔を合わせたストラスプールの美しい時代は、1920年から33年までの13年間続く。それは、『経済社会史年報』*Annales d'histoire économique et sociale* (1929-38)の企画・刊行にとって計り知れないほど重要な時期であった⁽²⁸⁾。

マルク・ブロックの生涯の総決算ともいべき大著『封建社会』(1939-40)⁽²⁹⁾が刊行されたとき、彼はもはやストラスブールの人ではなかった。1936年7月、ブロックは、ソルボンヌの経済史教授アンリ・オゼール Hauser, Henri (1866-1949) が退官したことにより、人事の経緯はあったものの、その後任のポストに任命され、パリに出てきていたのである。ソルボンヌの経済史講座は「周縁的な学科」の一つにすぎず、歴史家マルク・ブロックの知的関心を満足させるものではなかった。

一方、リュシアン・フェーヴルも、1933年、パリのコレージュ・ド・フランス教授に任じられ、そこで近代文明史講座を担当する。フェーヴル自らは経済社会史から思想史や心性史へ向かい、彼のいう「問題提起の歴史学」histoire-problème (歴史=問題、問題意識に導かれた歴史)は、ストラスブールを去って数年後、大著『16世紀における不信仰の問題』(1942)⁽³⁰⁾に結実する。

次節以下で、私は、上述の歴史学の巨匠の代表的なテキストについて社会学的分析を試みることにしよう。マルク・ブロックの初期の名作『奇跡を行う王』ならびに不朽の名著と讃えられる『フランス農村史の基本性格』、そして生涯の総決算の仕事となった『封建社会』に焦点を当て、そのテキストの社会学的な読解を行いたいと思う。『アナル』誌ならびにリュシアン・フェーヴルについては、それとの関連で簡単に触れる程度にとどめたい。

3. 『奇跡を行う王』：集合表象による神聖王権の解釈

リュシアン・フェーヴルは1897年高等師範学校 École Normale Supérieure に入学した。ここでヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの教えに接し、清新な影響を受けた。地理学者のヴィダルは、歴史学・社会学との協力を望んで、新しい雑誌『地理学年報』*Annales de Géographie* (1891-) をす

でに刊行していた。

ヴィダルによって創始された新しい人文地理学は、非現実的で偏狭な従来の外交史・政治史では満たされない、「現実に対する欲求を満たす」ものであった。ヴィダルが滋養に富む学問に高めた地理学を、フェーヴルは「清い空気、田舎での散歩、洗われた頭脳」と受けとめている⁽³¹⁾。

フェーヴルに影響を与えた人はほかにもいた。人類学=社会学のレヴィ=ブリュール Lévy-Bruhl, Lucien (1857-1939) がその人である。「心性」*mentalité* ということばを本格的に学術用語として使ったのはレヴィ=ブリュールで、その『未開心性』*La Mentalité primitive* (1922)⁽³²⁾は最も早い使用例の一つであるが、フェーヴルの「心性史」という用語にその影響を見て取ることができよう。

一方、マルク・ブロックは1904年、高等師範に入学する。ブロックが高等師範で最も恩恵を受けた教師は、社会学者エミール・デュルケムである。デュルケムは1904年から1913年まで、ここで「フランスにおける中等教育の歴史」*L'histoire de l'enseignement secondaire en France*, *History of Education in France* を講じている。デュルケムが高等師範で教え始めた時が、奇しくもブロックが入学した時と重なっていた⁽³³⁾。幸運な出会いといえるべきであろう。

ヴィダルの下で新しい人文地理学が創始されたように、デュルケム、シミアン、モース等の努力によって、社会学が一つの新しい学問として、また同時に「デュルケム学派」として形成されつつあった。ブロックは、後年、デュルケムの『社会学年報』*L'Année sociologique* (1898-) から「語り尽くせぬほどの最高のもの」を吸収したと述べている (1935)⁽³⁴⁾。

歴史学にとって新しい動きもあった。知的事業の推進者アンリ・ベール Berr, Henri (1863-1941) が、1900年、新しい雑誌『歴史総合雑誌』*Revue de synthèse historique* (1900-) を創刊したのである。アンリ・ベールの創刊の意図は、心理

学と社会学への歴史家の協力を呼びかけ、「歴史」心理学をつくり出すことにあった。二人の若い歴史学徒、リュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックは、彼の雑誌に寄稿して、協力を惜しまなかった。

フェーヴルの前期の著作の大きな特徴は、ヴィダルの影響を受けて、地域の輪郭を地理学的序論として描く歴史地理学にあった（『大地と人類の進化』1922）⁽³⁵⁾。これに対して、ブロックの歴史学の特徴は、地理学の影響は小さく、デュルケム社会学から大きく影響を受けていたということができよう。

デュルケムとシミアンの当時のアカデミズム歴史学に対する批判と挑戦は熾烈であった（1903-08）。デュルケムは、歴史学が入るべき部屋 room for history は、せいぜい史料を集め、年代を確定し、諸個人に焦点を当てるだけの「補助的な役割」をする狭い片隅 poor corner しか残っていないと言いつつ放った⁽³⁶⁾。さらにデュルケムは、「個別の事件」événements particuliers の歴史は表層の現象に過ぎず、国民のほんとうの歴史というよりは、むしろ「見かけ上の歴史」に過ぎないとして、これを斥けた⁽³⁷⁾。

経済社会学のシミアンは、ソルボンヌの歴史学者セニョボス Seignebos, Charles（1854-1942）に対して強力な攻撃を浴びせかけた⁽³⁸⁾。歴史家部族には三つのイドラ（偶像）がある、これをひっくり返し、破壊しなければならないというのである。一つは「政治のイドラ」である。それはすなわち政治史への執着であり、政治的事件に過大な重要性を与えていることへの批判である。二つは「個人のイドラ」である。それは「偉人」や「大人物」だけを取り上げ、これを強調するために、背後にある制度に眼を向けていないと批判する。三つは「起源のイドラ」idol of origins である。年代的な起源について没頭するのは、歴史家部族の悪しき習慣であると批判した。

こうした論争的な雰囲気の中で、社会学からの歴史学に対する批判に応えるかのように、歴史家

マルク・ブロックは初期の名作『奇跡を行う王』（1924）⁽³⁹⁾を世に問うたのである。

この本の主題は、フランス王とイギリス王の権力がいかにして獲得され、行使され、最後に失われたか、という問題である。そのアプローチは独創に満ちたものであった。すなわち、王に治癒能力があると民衆に信じられていた「瘰癧さわり touche, royal touch の民間信仰＝フォークロア」の起源、人気と流布、消滅を辿ることによって、中世から絶対王政を経て、18世紀に至までの神授王権の消長を跡づけようとするものであった。

フランスとイギリスの王は奇跡治癒者と信じられていた。王たちは瘰癧 king's evil 患者に触り、単に触るだけでこの疾患に罹った病人を治療すると称したし、また周囲の「民衆」からも王のこの治癒霊力は一般に信じられていた。

ブロックの問題提起は、次のようにいうことができる。「いったい、いつから王たちは不思議な力を発揮し始めたのか。どのようにして奇跡だと主張するようになったのか。いかにして王の臣民がこれを承認するようになったのか。そしていかにしてその奇跡の力は消滅したのか」⁽⁴⁰⁾。ブロックが解き明かそうとしたのは、この微妙な問題である。

ブロックは、神聖王権、奇跡王権の集合信仰を明らかにすることによって、「言葉の広い意味」におけるヨーロッパ政治史への寄与を目指していた。しかもこの政治史は、中世から18世紀にいたるまで保持されてきた集合信仰の「長期持続」longue durée の歴史である。さらにそれはフランス王権とイギリス王権の比較史のかたちをとっている。

ブロックによれば、カペー朝第2代のロベール敬虔王 Robert le Pieux（996-1031）がこの霊力をよく行使したが、それは依然、不安定だった王権の正統性を確立する手段として、王権に超自然的性格を賦与する政治的必要性があったからである。またイギリスにおいては、ヘンリ1世 Henry I（1100-35）とヘンリ2世 Henry II（1154-89）が、

グレゴリウス改革（教皇権力が世俗王権よりも優越すると主張する思想と運動）というローマ教会の挑戦に対して世俗王権の神聖性を主張する政治的手段として、「王の奇跡」たる治癒儀式を利用した⁽⁴¹⁾。

長期にわたって王権が人心を掌握した、その秘密を理解するためには、王政が臣民に押しつけた行政、司法、財政の表層の組織や法制度をいくら解明したとしても、まだ決して十分とはいえない。王権をめぐる花開いた「信仰と寓話の奥」を探ることが不可欠である。こうした民間信仰＝フォークロアの探究こそが、この神秘を解くのに遙かに多くを語るというのである⁽⁴²⁾。

ヨーロッパでは、フランスとイギリスにおいてのみ、王権は、軍事的・法的・制度的な外面的形態においてだけでなく、民衆が「王の奇跡」を信じるという集合信仰となってその内面にまで浸透した。それは、王権が民衆の政治的忠誠心を獲得するための心的用具＝心的装置として働き、王権に教会と競合できるほどの神聖性を与えた。

17世紀フランスにおいて、特にルイ14世 Louis XIV (1643-1715) の治世における癩癪さわりは、君主の神聖性と栄光を誇示するための、押しも押されもせぬ荘厳な儀式となった。儀式予定の布告が出されると、患者が殺到した。国境を越えて群れをなして押し寄せた⁽⁴³⁾。

イギリスの場合、チャールズ2世 Charles II (1660-85) の治世において王の「医師」「治療者」としての名声が最も高まった。チャールズ2世ほど、「奇跡を行う王」として成功した者はいない⁽⁴⁴⁾。

イギリスの名誉革命、ついでフランス革命が、王権の超自然的性格についての集合意識を掘り崩していく。アン女王 Anne (1702-14) が治療の身振りを見せたのは1714年のことで、これ以後、癩癪さわりの儀式は行われなくなった。ルイ16世 Louis XVI (1774-92) が一切の神授権とともに、奇跡の治癒力をも放棄しなければならない時がやってきた。1789年のフランス革命の勃発がその

時であった⁽⁴⁵⁾。

「王の奇跡」は、王権に対する民衆の忠誠心とパラレルに存在した。すなわち、王の奇跡に対する信仰は、王権に対する忠誠心が失われるとともに消滅したのである。

ブロックの『奇跡を行う王』は独創的な着眼点を持つ作品である。その独創性は、デュルケム社会学と王権の歴史を接合するという斬新な発想から生み出されたものである。そのキーワードはデュルケムの「集合意識」「集合表象」の概念で、それを歴史解釈に採り入れたのである⁽⁴⁶⁾。

この作品の中でブロックは、「心性」*mentalité* という言葉をあまり使ってはいない。この作品でブロックがしばしば使っている言葉は「集合意識」*conscience collective*、「集合表象」*représentation collective* という用語である。デュルケムは、集合意識を「同じ社会の成員に共通する信念と感情の総体であり、それ固有の生命力を持つ」と規定し、集合表象を集合意識の表現、集合意識の外化した観念的実在とみなしている⁽⁴⁷⁾。

ブロックは、集合意識を「王の奇跡を構成する迷信と伝説の集合体」という意味に使う。集合表象を「思想と信仰の総体の最も特徴的な表現」と規定し、「王の奇跡は最高政治権力に関する特定の観念の表現」と説明する。すべての民衆に課すことのできる「制度」は、同時にそれが「集合意識」という底流に支えられていなければならないと述べて、制度と集合意識との関係を明らかにしている⁽⁴⁸⁾。

ブロックは集合表象をさらに敷衍して、「人の心の深層にあって、何らかの契機でそれを呼び起こして長く人の心に力を振るう一つの制度たる刺激」といい、「癩癪さわりの儀式を可能ならしめた、信仰と感情の動きの複合体」ともいっている⁽⁴⁹⁾。

これと類似の用語に集合信仰 *croyance collective* があるが、これについてブロックは、「王の超自然的起源という信仰は人々の忠誠心から生まれた」といい、この集合信仰によって「王の癩癪

さわりが制度化された」のであり、「治癒儀式を可能にした人々の王権に対する信仰」が集合信仰であると述べている⁽⁵⁰⁾。

ブロックの結論は鮮やかである。王の奇跡に対する信仰は、「集合幻想」illusion collective だといっているのである。

— 「奇跡に対する信仰を生み出したのは、「奇跡がなければならぬ」という人々の信念 (=期待感)」であった。その信念に生命を与えたのは、奇跡に対する「集合信仰」であった。

— 「王の奇跡に対する信仰は、集合幻想の結果であるとしか考えられない。しかしそれは無害な錯誤であった。王の癡癡さわりに効果があるとすれば、それは一つだけ利点がある。つまり無害ということだ」⁽⁵¹⁾。

『奇跡を行う王』は20世紀歴史学の中で、ひときわ異彩を放つ独創に満ちた作品である。その理由は第一に、一つの歴史時代に限定されることなく、中世から18世紀に至るまでの、王権に対する集合信仰=集合表象の「長期持続」の歴史を扱っているという点である。第二に、さまざまな歪曲を免れない民間信仰=フォークロアに批判的方法を適用し、王権の神秘的・超自然的性格にアプローチしていることから、この作品は、「心性史」の草分けとして位置づけられてきた。しかしむしろ、この作品は、思想史と政治史を集合表象を媒介にして、深みのある新しい政治史を構築したと見られるのである。そして、第三に、以上を総括すれば、『奇跡を行う王』はデュルケム社会学を歴史解釈に適用し、歴史社会学・歴史人類学の新しい領野を切り開いたものとして位置づけることが最も妥当であろう⁽⁵²⁾。

4. 『フランス農村史の基本性格』：フランス農村の社会類型、農業文明の析出と逆行的=遡行的方法

マルク・ブロックの作品の中で、わが国の歴史学徒に古くから読まれ、難解な思いとともに親近

感を抱かせる作品といえば、それは『フランス農村史の基本性格』であろう⁽⁵³⁾。

私はこの『基本性格』について二つの視点から問題を取り上げ、その問題に対する社会的な読解を試みようと思う。

4-1 ヨーロッパ農業文明とフランス農村の社会類型

その一つは、「フランス」農村史を「ヨーロッパ農業文明」civilisation agraire という比較史的方法で捉え、その文明を支えるのが「社会」だという視点である⁽⁵⁴⁾。

いま一つは、シミアンが批判・攻撃し、歴史家の陥りやすい欠点として揶揄中傷した「起源のイドラ」に関する問題である。ブロックは、この「起源のイドラ」の批判に対して、歴史を逆に読む逆行的=遡行的方法 méthode régressive を提起し、歴史研究の方法的態度を明確に打ち出した。それは一言でいえば、「現在から過去を読む」方法であり、その方法的態度はすぐれて社会学的方法に通じている⁽⁵⁵⁾。

ブロックの問いは「何がフランス農村史の基本性格であったのか」である。ブロックは、長い世紀にわたってほとんど動かない「農業慣行」、変化の循環に入り込んだ「農業技術と農業経営」、つまり農業慣行と農業技術・経営の組合せを農業文明と捉え、それを同時に理解することにより、また耕地の解剖図(地籍図)を綿密に検討することによって、フランス農業文明には三つの社会類型が混在していることを見出した⁽⁵⁶⁾。

第一の地域は、北ヨーロッパ的性格が支配的な北部フランスである。ここの農地制度は、平坦で長い並行した開放耕地 open field からなる。農業技術では車輪付きの犁を用い、三圃式農法 three-field system を農業慣行としている。農村社会は、共同体強制が強く働き、共同体の法と責任を必要とする。耕地の占有者に対する共同体の圧力は強力であった。ブロックは、この農村類型を「開放・長形耕地」の地域と呼んでいる⁽⁵⁷⁾。

第二の地域は、南部の地中海ヨーロッパ地域である。この農地制度は、岩だらけの山がちな土地と不規則な耕地からなる。農業技術・農業慣行では、車輪なしの犁が用いられ、二圃式輪作が行われる。農村社会では、かなり弱い程度の共同体的精神が伴う。共同作業がそれほど発達していない。共同放牧による耕地の共同利用も厳密には行われていない。社会的な網の目は粗く、切り離された農地では、全体的に規制された共同労働はない。耕地の占有については個人主義的であった。ブロックは、この農村類型を「開放・不規則耕地」の地域と呼んでいる⁽⁵⁸⁾。

第三の地域は、フランス西部と中央部である。この農地制度は、森林と高地、貧しい土質、痩せた土地に制約され、農地は囲い込み地である。農業技術・農業慣行では、犁が用いられたり用いられなかったり、耕作は断続的である。農村社会は、囲い込み地の中心部に村落と言えない程度の小村、すなわち、ひとにぎりの家屋がある。個人的創意に基づいて行われた開墾が決定的なものであり、個々人の自立性が強く、共同体の威力は耕地については停止している。垣根や壁に保護された耕地は共同放牧を知らない。各々の農業経営者は少数の地片しか占有しないが、その占有は安定している。ブロックは、この農村類型を「囲い込み地」の地域と呼ぶ⁽⁵⁹⁾。

農地制度は単に自然環境条件だけからでは説明できない。農業技術と社会結合という社会的条件を持ち込む必要がある。こうした社会的条件から見れば、フランスにおける農業文明は三つの社会類型に分けることができる。

第一の類型は、長い間、19世紀に至るまでフランスの大部分の地方がそうであったように、痩せた土地と弱い占有の型の「囲い込み地制度」である。

ついで現れるのが緊密な占有のタイプの農村で、これが第二の類型である。第二の類型は「北方型」といいうるものである。それは、車輪付きの犁による三圃式輪作を行う開放耕地の農村で、耕

地の占有者に対しては共同体強制が強く働き、共同体の強固な結合力を特徴とする。この「北方型」の制度は特殊フランス的なものではなく、北ヨーロッパの広大な地域を覆っているものである。フランスに見られるこの「制度」は、遙かに広い面積のうちの一断片でしかない。

第三の類型は「南方型」と呼びうるものである。それは、車輪のない犁を使い二圃式輪作に忠実である。耕作者の占有と農業生活に対しては、かなり弱い程度の共同体的精神が伴う。この「南方型」もフランス的というよりは、南ヨーロッパに広く行われており、フランス国境を越えてイタリアでは特に普及していたものである⁽⁶⁰⁾。

このように見てくると、「北部」と「南部」の農業文明の二大形態がフランスにおいて衝突しつつ共存していることが分かる。この二つの類型に古くからフランスに存在する「囲い込み地制度」を加えると、農業文明の対照的な三大タイプが共存し混在していることが、フランス農村史の顕著な「基本性格」であるというのである⁽⁶¹⁾。そしてこうした共存・混在が「基本性格」であったからアンシアン・レジーム下の農村では、共同体強制を廃棄して、土地の私的所有による囲い込みの強化を促進できなかった。それゆえ、共同体的生活を維持しつつ、個々人の所有権をも同時に尊重することになったというのがフランス農村史の特色であったと締めくくる⁽⁶²⁾。——これがマルク・ブロックの『基本性格』の結論である。

4-2 逆行的=遡行的方法

次に第二の問題に移ろう。それは、シミアンの歴史家への批判、「起源のイドラ」に拘泥する歴史家への痛烈な非難であるが、この問題に対するブロックの明快な回答が、この『基本性格』の方法的態度に示されているのである。

この『基本性格』は農村社会や農業文明の解明だけでなく、歴史を逆に読む「逆行的=遡行的方法」*méthode régressive* という方法論においても再評価すべき作品である。逆行的=遡行的方法

とは、どういうことなのか。

それは簡単にいえば、歴史は現在から過去へ向かって読まなければならない、最も知っているものから、それほど知らないものへ向かう必要がある、という主張である。それは、「現在によって過去を理解する」*understanding the past by the present* といってもいい⁽⁶³⁾。

ブロックは一つの事例を挙げながら、逆行的＝廻行的方法を採用した経緯を述べている。

1885年頃、イギリス荘園制の古典理論を構築した歴史家（元銀行家）フレデリック・シーボーム *Seeböhm, Frederick* (1833-1912) は、かつて住んだことのあるヒッチン *Hitchin* の村（イングランド）を調べ、そこで行われていた開放耕地制度の研究をしていた。彼はフランスの著名な歴史家フュステル・ド・クーランジュ *Fustel de Coulange, Denis Numa* (1830-89)（高等師範時代のデュルケムの歴史学教授）に手紙を書き、この開放耕地の農業類型がフランスにあるかどうかを尋ねた。これに対してフュステルは「その痕跡すら認められない」と返答した。

ところが実際には、開放耕地制度は、北部および東部フランスではごくふつうに見られた農業類型であった。

フュステルは、シーボームからの手紙を受け取ったとき、議会では古い農村共同体の慣行である共同放牧をどうすべきかについて議論が戦わされていたが、この議論にも全く無関心であった。フュステルが参照したのはきわめて古い文書だけであった。文書史料からでもこの制度は証拠が見つかるのだが、フュステルは何ものをも見出さなかった。いったいどうしたことだろう⁽⁶⁴⁾。

フュステルは古い文書それ自体しか考えず、近い過去を見ようとしなかった。当時のアカデミズム歴史学者と同様に、彼は「起源」の問題に打ち込んでいたので、彼の研究方法は「最も古いところから最も新しいところへ」一歩一歩辿っていく年代記的な方法に忠実であった。この方法は伝統的歴史学の方法であった。

フュステルは封建制の「起源」*origins* の研究に専念したが、その描いたイメージは混乱していた。農奴制の「始源」*beginnings* についても文献の読み誤りのために、全くちぐはぐな説を唱えていた⁽⁶⁵⁾。

一方、フュステルに問い合わせの手紙を出した当のシーボームの『イギリス農村共同体』（1883）は、「現在残存するものからイギリスの開放耕地制度を検討する」という章から始まっていた。この研究は、ブロックの方法的な関心にかなり近づいていたのである⁽⁶⁶⁾。

「最も遠い事柄」は「最もはっきりしない事実」である。だとすれば、「最もよく知られたもの」から「それほど知られていないもの」へ向かう必要がある。歴史家は史料の奴隷になってはいけない。だから、歴史は「逆に」*à rebours*（現在から過去に向かって）読まなければならない、とブロックは主張する。そして言う。「歴史は変化の科学である」、「歴史家がかみとろうとしているのは変化である」と⁽⁶⁷⁾。

かつての耕地規制（耕地制度）は稀にしか変化しなかった。しかしながら、耕地規制は永続性を主張しうるものではない。それは突然に、あるいは徐々に変化する。生活とは「動き」にほかならない。

「時の流れを逆の方向に辿ってゆこう」。18世紀から一飛びに石器時代に移ることはしないで、一つの区切りから次の区切りへ進むことでなければならない。これがブロックのいう逆行的＝廻行的方法である。この方法で捉えようとするものは、フィルム最後の一コマである。次いでそれを逆に巻き取ろうとする。空白もあるだろう。変化をあくまで尊重する方法が逆行的＝廻行的方法であるというのである⁽⁶⁸⁾。

ブロックは、ベルギーの偉大な歴史家アンリ・ピレンヌに同行して、ストックホルムへ旅行したことがある。そのときのピレンヌの言葉がこの逆行的＝廻行的方法の有効性を語っている。——「私たちがストックホルムに着くなり、ピレンヌ

は私に言った。「まず何から見ることにしようか。ここには新しいシティ・ホールがあるようだ。そこから始めようか」。そして私の驚きをかわすように付け加えた。「もし私が好古家 antiquarian であるならば、古いものだけに眼を向けるだろう。だが私は歴史家 historian だ。だから私は現に生きているもの life を愛する」⁽⁶⁹⁾。

現に生きているものを理解する能力、これこそが歴史家の優れた資質である。どうしたらこの能力を獲得できるのか。ピレンヌ自身がその実例を示したように、現在との不断の交渉以外にないだろう。「起源のイドラ」の洞窟から抜け出して、現に生きている社会の中に生きること以外にないだろう。「歴史を逆に読む」、現在から過去を理解するとは、社会の中に生きることにはほかならない⁽⁷⁰⁾。

ブロックの方法的態度、すなわち、各地域で行われている「現在の」農業慣行を観察する、地籍簿を仔細に読む（せいぜい遡っても18世紀の図面どまりであるが、そこから中世農村を透視する）、それから残存する史料を読む、フランス一国の史料に限定されることなく国境を越えた各国・各地域の史料に目配りをする、その上に立ってフランス農村史を全ヨーロッパの視野から位置づける「比較史の方法」を採用している。こうした方法的態度は、社会学の方法に通じているばかりでなく、以後の比較社会研究に多大な貢献をもたらした。

マルク・ブロック以前に逆行的＝遡行的方法を試みた人に、イギリスの法制史家メイトランド Maitland, Frederic William (1850-1906)⁽⁷¹⁾ やシーボームなどの先駆者はいた。たしかに先達はいるにはいた。しかし、ブロックはこの方法を広いヨーロッパ的視野のもとに自覚的に捉え、系統的に駆使した点で異彩を放っている。こうした方法的態度によって書き上げた名作が『フランス農村史の基本性格』であった。

5. 『封建社会』：封建制の比較社会学

マルク・ブロックの大著『封建社会』（1939-40）は、その生涯の仕事における総決算ともいべきものであった⁽⁷²⁾。リュシアン・フェーヴルは当時を回想して次のように語っている。——「『人類の進化』叢書 *L'Évolution de l'humanité* に『封建社会』の分厚い二巻が続けざまに出たとき、勝負は決定的に勝ちだった。偉大なフランス人歴史家の誕生したことを世界中が知った。否、偉大なヨーロッパ人歴史家、というほうが当たっている。マルク・ブロックは比類ない科学的装備をいかに辛抱強く身につけていったか。道具は親方の手の内で完全であることが分かった」⁽⁷³⁾。

ブロックがこの著作に着手しようとしたとき、まず念頭に浮かんだのは、アンリ・ピレンヌが『マホメットとシャルルマーニュ』（1937）で主張した歴史テーゼ、すなわち「イスラムの侵入によるヨーロッパ世界の形成」という構想であっただろう⁽⁷⁴⁾。

ブロックの『封建社会』は、歴史学の目から見れば、「外民族（イスラム、マジヤール、ノルマン＝ヴァイキング）のヨーロッパ社会への侵入による封建制の形成」と読むことが可能である。ピレンヌの構想とブロックの発想とは実によく似ているのである。

しかし、この『封建社会』全編を流れる基調はすぐれて社会学であり、この大著の主調音は「封建制の比較社会学」であるといっても過言ではない。なぜならば、随所にレヴィ＝ブリュール、アルヴァクス、デュルケムの方法や概念が駆使され、その影響が濃厚に認められるからにほかならない。以下で、歴史学と社会学の主要な接点を検証してゆくことにしよう。

5-1 社会的凝集力と封建社会の形成：外民族の侵入に対する「従属の紐帯の形成」

まず第一に、デュルケムは『社会分業論』（1893）において「社会の凝集力」を主要なテー

マの一つとして論じているが⁽⁷⁵⁾、ブロックは、これに呼応するように、封建社会の凝集力を「従属の紐帯の形成」formation des liens de dépendance に求めている点である⁽⁷⁶⁾。すなわち、特別な社会環境のニーズに適応するものとして、「従属の紐帯」が形成されたと機能主義的に説明する。特別な社会環境とは、ほかでもない、イスラムの侵入、マジヤールの侵入、ノルマン=ヴァイキングの侵入という、ヨーロッパ社会への外民族の三つの侵入を指している。この外民族侵入の三つの波に対するヨーロッパ社会の応答=対応として「従属の紐帯」が形成され、それが社会の内側に向かう凝集力として働き、それによってヨーロッパ封建社会が形成されたと説明する。この封建社会の形成は「ほとんど日本以外の地域とは共有していない」異例の特権であり、深い意味における「ヨーロッパ文明の基本要素の一つ」であると主張するのである⁽⁷⁷⁾。

これは、ピレンヌ・テーゼのアイデアを受け継ぎながら、デュルケム社会学を歴史解釈に適用した「合わせ技」の妙技である。

5-2 封建社会の集合意識：中世人の「感じ方、考え方」

第二に、封建社会の集合意識を正面から取り上げていることに、われわれは特に注目しなければならない。封建社会に生きる人々の「感じ方、考え方」façon de sentir et de penser, how to feel and think とは「集合心性」にほかならない。ブロックは「感じ方、考え方」と題した章で、封建時代の人々の時間に対する非常な無関心、君侯でさえも読み書きができなかったノンリテラシーの知的状況、カトリックが民衆のあいだには不完全にしか浸透していなかった宗教的心性を語っている⁽⁷⁸⁾。

特に「時間」や「数字」に対する中世人の無関心に関する議論は、本書の中で独創に満ちた叙述であり、後続の社会史家に影響を与えた⁽⁷⁹⁾。この部分を読むと、われわれは知的好奇心を触発さ

れるばかりでなく、知的エンターテインメントを楽しむことができる。

時間感覚、リテラシー、宗教的心性に関して具体例を挙げて説明しておこう。

— (1) 時間は浮動していた。某日、ある決闘裁判が行われることになり、一方の男は明け方に現れ、予め決められた時刻まで待った。ところが相手が現れない。当の男は義務不履行だと言って、裁判に訴え出た。本当に決められた時刻はいつだったのか。裁判官たちは協議を繰り返したが、これが決められず、「教会の鐘」を鳴らす聖職者に時刻を尋ねて、判決を下した。裁判官たちは一日の一時刻を知るために協議し、教会に尋ねなければならぬほど、時間の測定は不安定で浮動していた。

— (2) 時間測定の不安定さは、時間に対して無関心や無頓着をもたらす。君侯の誕生日のような重要な日付でさえ記載は乏しく、君侯の年齢をどうにか確定するために、わざわざ一連の調査をしなければならなかった。

— (3) 時間の観念だけでなく、「数の領域」全体に曖昧さが漂っていた。イギリスのウィリアム征服王 William the Conqueror (1066-87) は約5千の騎士封を設定したというのが史実であるが、年代記作者たちは3万2千から6万の「軍役奉仕の保有地」を設定したと好んで表現した。正確さへの志向、その支柱たる「数字」を尊重する心性は、彼らの精神には欠落していた。

— (4) オットー大帝 Otto I (936-973) は30歳になってからやっと読むことを学び始めた。コンラート2世 Konrad II (1024-39) は「名前を書くすべを知らなかった」。アルプスの北、ピレネーの北の中小領主の大部分は字の読み書きができなかった。大多数の領主、多数の高位の諸侯は、ほとんど書き物には無縁であった。それゆえに彼らは文書には、ほとんど無縁であった。

— (5) 人間の知識や救済、政治的支配を確保するのにふさわしいはずの手段たる「言語」を、人事百般を支配する立場にいる諸侯・領主の多く

はほとんど理解できなかったのである。

— (6) この時代の集合心性に関して最も重大なことは、カトリシズムが民衆の中に不完全にしか浸透していなかったことである。西暦 1000 年の直前にパリの教会では説教者が、この年を「世の終わり」とであると告げていた。しかし最後の審判という世界の恐怖は民衆には広がらなかった。彼らの「時の意識」は季節の移り変わりや教会儀式の毎年繰り返される時のリズムに注意が向けられただけで、封建社会に生きる人々は、年数によって、ましてやキリスト起源に基づいて計算された年数によってものを考えることはしなかった⁽⁸⁰⁾。

これらが封建社会の集合心性の「社会的事実」fait social であるとブロックはいうのである。続く章は「集合的記憶」memoire collective に当てられている⁽⁸¹⁾。過去を重んずる心的傾向から「歴史編纂」が行われ、同時代人は、俗語で書かれた「叙事詩＝武勲詩」chansons の朗誦を聴くことを好んだことが語られる。武勲詩は、その時代の感じ方や考え方の共通的・共有的な表現であり、世代から世代へ集合的遺産として伝えられてきた主題である。それは集合的記憶の「文学」と言うことができる。武勲詩が表現していた人生観に、その聴衆の人生観が反映されていたからこそ、その朗誦を好んで聴いたのである。

マルク・ブロックは、この二つの章を締めくくりに当たって、次のように述べる。「社会は文学の中に自分自身の姿をつねに見つけだそうとする」⁽⁸²⁾。

ピーター・バークは、この文体がデュルケムそっくりの響きを持っていると指摘しているが、封建社会の集合意識を論じるこの独特な章は、ストラスブル時代と同僚との集い、リュシアン・フェーヴル、シャルル・ブロンデル、特に社会学の友人で『集合的記憶』（1950）の遺著のあるモーリス・アルヴァクス⁽⁸³⁾との会話から導き出されたものであることは疑いを入れない。

5-3 比較の方法と社会類型：ヨーロッパ封建制の遺産としての「契約の観念」

第三に、比較の方法や社会類型 type social, social type に関して、デュルケムの影響が色濃く認められるのは、「社会類型としての封建制」la féodalite comme type social と題された本書の結論部分においてである⁽⁸⁴⁾。

デュルケムは「比較の方法」méthode comparative について次のように述べている。— 社会的説明は、もっぱら因果関係を確定することにある。社会現象は実験者の手の及ばないものであるから、「比較の方法」のみが社会学に適合する⁽⁸⁵⁾。

またデュルケムは、機械的連帯から有機的連帯への社会の構造変化を社会類型の進化と捉えていた。有機的連帯の中でも諸個人の自発的な契約に基づく契約的連帯は、「高級種の社会」では、何ものによっても乱されはならぬと言っていた⁽⁸⁶⁾。

契約関係は分業とともに発展する。分業は交換がなければ不可能である。この交換の形式こそが契約であると、デュルケムは規定する⁽⁸⁷⁾。

ブロックは、『封建社会』の結論において、次の二点を強調している。まず第一点は、封建制はヨーロッパ文明だけに見られる現象ではなく、ヨーロッパにほぼ近い社会進化を歩んできた他の文明においてもありうると指摘していることである。すなわち、健全な「比較の方法」によれば、日本もまた封建制の段階を経過し経験したというのである。— 「封建制は《世界に唯一度起こった現象》ではなかった。ヨーロッパと同様、いくつかの相違点は存在するが、日本もまたこの段階を経過したのである。他の諸社会もこの段階を経過したのであろうか。もしそうならば、いかなる原因の影響下によってなのか。それは共通の影響によるものであろうか。これは未来の研究が解くべき鍵である」と述べる⁽⁸⁸⁾。

ブロックは、ヨーロッパ封建制と類似した制度を生み出した社会として日本を引き合いに出しているが、彼の「比較の方法」に援用されたものは、

同時代の日本人歴史家、朝河貫一（1873-1948）、福田徳三（1874-1930）の研究であった⁽⁸⁹⁾。ヨーロッパ封建制に特徴的な人間的紐帯は、身近な「封主」＝主君 chefs に対する服従者の契約による紐帯である。これに対して、日本の家臣制は、ヨーロッパの家士制 vassalité に比べると、はるかに強い服従の行為であって、契約という性格に乏しかったと言っている。さらに日本の家臣制は複数の主君を認めなかったことから（「二君にまみえず」）、厳格の度が強いと、その相違点を指摘している⁽⁹⁰⁾。

第二点は、ヨーロッパ封建制に独自の性格は「契約」contract の観念であると強調している点である。彼は、この契約観念をヨーロッパ文明の遺産であると捉えるのである。この点について、ブロックは次のように説明する⁽⁹¹⁾。

すなわち第一に、ヨーロッパにおいて家士 vassal の誠実義務の誓約 hommage は真正正銘の契約であり、かつ双務的であった。悪しき封主を見棄てるという権利は、一般に家士に認められていたが、それがさらに悪王を廃位すべしとする根拠の一つとされた。この契約の観念は家士たちの心性を形成した。

第二に、「国王あるいは裁判官が法に反して行動するときは、何人たりとも、国王と裁判官に抵抗し、彼らに対する戦いは許される。そのような行為は誠実義務にもとるわけではない」とザクセンシュピーゲル Sachsenspiegel（13世紀前半に編纂されたドイツの法律書）は謳っている。この「抵抗権」という考え方は13-14世紀のヨーロッパで鳴り響いた。イギリスのマグナ・カルタがその実例の一つであるが、イギリスの「議会」（会議体）Parliament、フランスの三部会 États、ドイツの身分制議会 Stände など、きわめて貴族制的色合いの濃い代表制会議体（王権に対する、主として貴族代表のチェック機能）が諸国家に生成したことに、この抵抗権の軌跡を見ることができる。

かくて第三に、権力を拘束しうる契約＝協約

pacte という心性を培ったところに、ヨーロッパ封建制の、ヨーロッパにしか見られない独自性が認められる、というのである。ヨーロッパ封建制がいかに下層の人々に苛酷であったとしても、それはヨーロッパ文明に契約の理念を継承すべき遺産として残した、というのが、ブロックが「比較の方法」によってついに到達した、確信に満ちた結論である。それは、独仏戦争が第二次世界大戦へ拡大する現代史の激動の中に身を置きながら、自らが信じるヨーロッパ文明への献身（オマージュ）と自らの学問的営為に対する矜持を格調高く表明したものであった⁽⁹²⁾。

ブロックの『封建社会』は、①ヨーロッパ封建制の形成の契機として「社会的凝集力」の概念を用いている点で、また、②さまざまな「社会類型」を検討した上で、封建制が他の文明にもありえ、それがヨーロッパで《世界に唯一度起こった現象》でなく、他文明においても繰り返されている可能性がある点で、想定した点で、さらに、③遠く離れた日本においても類似の制度が見られることを「比較の方法」で明らかにしようとした点で、格段に社会学的な色彩の濃いものになっている。

マルク・ブロックがこの大著で言いたかったことは、次の一点に向かって収斂していると読むことができる。すなわち、ヨーロッパ封建制はヨーロッパ文明に残した「遺産」であり、その遺産の核心をなすものは「契約の観念」という心性に求めている点である。その意味でブロックの生涯の総決算となった『封建社会』は、歴史のデュルケムの解釈に満ちあふれた作品となって結実したのである。

ブロックが『封建社会』を世に問うたとき、彼はもはやストラスブールの人ではなかった。1933年、一足先にリュシアン・フェーヴルはストラスブールを去って、パリのコレージュ・ド・フランスの教壇に立っていた。マルク・ブロックは、1936年ストラスブールをあとにした。ソルボンヌのアンリ・オゼール Hauser, Henri（1886-

1949)の後任人事として、彼はそこで経済史講座を担当することとなった。二人はパリへ移動した。二人の努力によって刊行されていた『経済社会史年報』(アナル)はいよいよ成功するかにみえた。先行きには一抹の不安があった。前途には大きな悲劇が待ち受けていたのである⁽⁹³⁾。

(以上前編終)

* 以上で本稿の前編を終える。「はじめに」に書いた問題提起のうち前半部分で本稿をひとまず閉じる。ブローデルの時代、ブローデル以後の動向については、機会を改めて論じることにした。

注

- (1) ピーター・バークの説を参照した。Burke, Peter, *The French Historical Revolution: The Annales School 1929-89*, Polity Press with Basil Blackwell, 1990. =ピーター・バーク、大津真作訳『フランス歴史学革命—アナル学派 1929-89年』岩波書店、1992年。
- (2) リュシアン・フェーヴルの「マルク・ブロックとストラスブール—或る偉大な歴史家の思い出」は素晴らしい回想の文章である。Febvre, Lucien, *Souvenirs d'une histoire: Marc Bloch et Strasbourg (1945, 1953), Combats pour l'histoire*, Armand Colin, 1953. =リュシアン・フェーヴル、長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』創文社、1977年、所収。
- (3) Braudel, Fernand, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, Armand Colin, 1949, 2^e éd., 1966. =浜名優美訳『地中海』全5巻、藤原書店、1991-95年。英語版 *The Mediterranean and the Mediterranean World in the Age of Philip II*, HarperCollins, 1972.

『地中海』においてブローデルは、「歴史の時間」を三層において捉える。第一は、「ほとんど動かない歴史」almost timeless history である。それは環境と人間との歴史であり、「構造」structureの歴史とも呼ぶ。この上に第二に、緩慢なリズムを持

つ歴史がくる。それは「社会の歴史」「社会史」social history であり、さまざまな人間集団と集団再編成の歴史である。それは「構造」に対して経済、国家、社会、文明がいかに働いているかを示そうとする。「変動局面」conjonctureの歴史とも呼ぶ。歴史の潮の強力な運動によって、第三に、表面の動揺・波立ちがくる。短く急で神経質な揺れを持つ歴史がくる。これが「個人の次元での歴史」「出来事 eventsの歴史」である。「この出来事の歴史は面白いが危険である」という。ブローデルはこうした歴史の捉え方から、歴史の時間を地理的な時間、社会的な時間、個人の時間の三層に分けている。この多様な時間をすべて把握し、複数の歴史を一瞬の同調の中で見てとり、これらの時間性の総計がつかみとられたとき、それだけが全体史 total history を構成する、というのである。

しかしながら、これらの時間性を総計したとしても、歴史の「深さ」はとらえられない。そうではなく、それらの時間性と人間との相互関係＝「相互連関」の構造が問われてこそ、はじめて歴史の説明となるであろう。ブローデルにおいてはこの点が根本的に問われなければならない。

また、地理的環境を「ほとんど動かない歴史」と見て「構造」と捉えているが、それは「歴史とは変化の科学である」と規定するブロックの歴史認識と食い違う。さらに地理的環境を「構造」と捉え、諸集団の運命を緩慢に動く「変動局面」と見て、それらが人間の日常生活や出来事に多大な影響を及ぼすとブローデルは考えるが、それは「歴史とは人間たちの科学である」と規定するフェーヴルの歴史認識とも異なってくる。ブローデルからは「変化」や「人間たち」が見えてこない。ブローデルから見えてくるものは、歴史の「環境的＝地理的決定論」である。そこにはフェーヴル＝ブロックの歴史的社会的把握からの乖離がある。歴史的社会的「構造」とは人間と人間との相互関係の構造、人間相互の行為の構造であり、「構造変動」とはその構造の変化でなければならない。ブローデルに対する批判の根底的理由は、実はそこ

- にあると思われる。
- (4) Le Roy Ladurie, Emmanuel, *Montaillou : Village occitan de 1294 à 1324*, Gallimard, 1975. =エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ、井上幸治・渡邊昌美・波木居純一訳『モンタイユー ビレネーの村 1294～1324』刀水書房、1990-91年。
- (5) ロバート・ダーントンの代表作として次の二点を挙げておく。Darnton, Robert, *The Literary Underground of the Old Regime*, Harvard University Press, 1982. =ロバート・ダーントン、関根素子・二宮宏之訳『革命前夜の地下出版』岩波書店、1994年。Darnton, *The Forbidden Best-Sellers of Pre-Revolutionary France*, Norton, 1995. =ダーントン、近藤朱蔵訳『禁じられたベストセラー——革命前のフランス人は何を読んでいたか』新曜社、2005年。
- (6) リュシアン・フェーヴル、長谷川輝夫訳『歴史を生きる——歴史学入門』(1944)、前掲『歴史のための闘い』所収。
- (7) Bloch, Marc, *Les Caractères originaux de l'histoire rurale française*, Oslo, 1931; Armand Colin, 1952. =マルク・ブロック、河野健二・飯沼二郎訳『フランス農村史の基本性格』創文社、1959年、序、6頁以下。
- (8) ここで引用したフェルナン・ブローデルの歴史学と社会学に関する論文は、Braudel, Fernand, *Histoire et Sociologie*, Gurvitch Georges (éd.), *Traité de Sociologie*, PUF, 1958-60, Chap.4. =井上幸治編集・監訳『フェルナン・ブローデル 1902～1985』新評論、1989年、所収の「歴史学と社会学」。
- (9) ル・ロワ・ラデュリの日本における対談記録「ルロワ＝ラデュリにきく」(1983年11月)ならびに「ヨーロッパ社会の研究における人類学と歴史学」におけるル・ロワ・ラデュリの発言(1977年4月)。上記二編は、ジャック・ルゴフほか、二宮宏之編訳『歴史・文化・表象』(*Histoire/cultures/representations: Les Annales et l'anthropologie historique*) 岩波書店、1992年、所収。
- (10) Contemporary Authors 編集部 のダーントンとの電話インタビューは1984年10月、プリンストンで行われた。その記録は以下に収録されている。CA Interview, *Contemporary Authors*, Vol.116, pp.105-108.
- (11) 井上幸治編集・監訳『フェルナン・ブローデル 1902～1985』新評論、1989年、序。
- (12) 前掲「ヨーロッパ社会の研究における人類学と歴史学」におけるル・ロワ・ラデュリの発言(1977年4月)。
- (13) 前掲、パーク、大津訳『フランス歴史学革命』144頁以下。
- (14) Fink, Carole, *Marc Bloch: A Life in History*, Cambridge University Press, 1989. =キャロル・フィンク、河原温訳『マルク・ブロック——歴史のなかの生涯』平凡社、1994年、100-06頁。
- (15) リュシアン・フェーヴル、長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』創文社、1977年、所収の「マルク・ブロックとストラスブル——或る偉大な歴史の思い出」より。
- (16) Bloch, Marc, *Rois et serfs: un chapitre d'histoire capétienne*, Paris, 1920.
- (17) デュルケムは「制度」institutionを以下のように規定する。「われわれは、集合体によって制定された信念や行為様式を制度と呼ぶことができる。その場合、社会学は諸制度およびその発生と機能に関する科学と定義される」(デュルケム、宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波文庫、1978年、43頁)。
- (18) Bloch, Marc, *The Historian's Craft*, Manchester University Press, 1954, p.22. フランス語版はジャック・ル・ゴフ Le Goff, Jacques の序文付きで新版が出されている。Bloch, Marc, *Apologie pour l'histoire ou Métier d'historien* (1949), Armand Colin, 1993. ここでは英語版によっている。
- (19) Bloch, Marc, *Les Rois thaumaturges: Étude sur le caractère surnaturel attribué à la puissance royale particulièrement en France et Angleterre*, (Strasbourg, 1924), Armand Colin, 1961. =井上泰

男・渡邊昌美訳『王の奇跡——王権の超自然的性格に関する研究／特にフランスとイギリスの場合』刀水書房、1998年。デュルケムは、集合意識 *conscience collective* を次のように規定する。「集合意識の諸状態は、個人意識の諸状態とは性質を異にしており、別種の表象をなしている。集団の心性は、個々人の心性とは異なったものであり、それ固有の諸法則を持っている」（前掲、デュルケム、宮島喬訳『社会学的方法の規準』32頁）。「同じ社会の成員たちのあいだに平均的に共通する信念と感情の総体は、固有の生命を持った一定の体系を形成する。これを集合意識と呼ぶことができる」（デュルケム、田原音和訳『社会分業論』青木書店、1971年、80-81頁）。

- (20) Bloch, Marc, *Les Caractères originaux de l'histoire rurale française*, Oslo: H. Ashenhoug & Co., 1931. = マルク・ブロック、河野健二・飯沼二郎訳『フランス農村史の基本性格』創文社、1959年。
- (21) Durkheim, Émile, *Les Règles de la méthode sociologique*, PUF, 1895. = デュルケム、宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波文庫、1978年、第4章に「社会類型」、第6章に「比較の方法」が述べられている。
- (22) Blondel, Maurice, *Introduction à la psychologie collective*, Armand Colin, 1928.
- (23) リュシアン・フェーヴル、長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』創文社、1977年、所収の「マルク・ブロックとストラスブール——或る偉大な歴史の思い出」より。
- (24) Fink, Carole, *Marc Bloch: A Life in History*, Cambridge University Press, 1984. = キャロル・フィンク、河原温訳『マルク・ブロック——歴史のなかの生涯』平凡社、1994年、109-10頁。
- (25) Lefebvre, George, *La Grande Peur de 1789*, Paris, 1932, nouv. éd., 1970.
- (26) Lefebvre, George, *Foules révolutionnaires* (1932, 1934), *Étude sur la Révolution française*, PUF, 1954. = 二宮宏之訳『革命的群衆』創文社、

1982年。ここでルフェーヴルは、1789年の群衆が単なる「集合体」から革命的な「結集体」*rassemblement*へ変容させる社会的要因を「集合心性 *mentalité collective* の形成」に求めている。集合体の成員のあいだに心的相互作用 *action intermentale* が働き、集合心性が形成される。心的相互作用と集合心性が醸成される契機は、農作業、日曜のミサ、週市、夜の集いなどであり、そこで仲間と会って日常的な会話 *conversation* を交わすことにある。都市民には部分的に新聞プロパガンダも作用した。情報は口づてに伝えられた。革命的結集体は明確な行動への志向をもち、「確信」を共有する。ルフェーヴルは革命的群衆を、集合心性の形成を媒介とした集合体から結集体への変容と捉える。この際キーポイントになるのは日常生活の会話・雑談による「集合心性」の形成である。ここに社会学的視点を明瞭に認めることができる。

- (27) リュシアン・フェーヴル、長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』創文社、1977年、所収の「マルク・ブロックとストラスブール——或る偉大な歴史の思い出」(Souvenirs d'une grande histoire: Marc Bloch et Strasbourg, 1945, 1953) より。
- (28) リュシアン・フェーヴルは「風に逆らって——新しい「年報」(アナル)のマニフェスト」(1946)でいう。「何という改称好き！初めは『経済社会史年報』*Annales d'histoire économique et sociale* (1929-38)、次は『社会史年報』*Annales d'histoire sociale* (1939-41)、またその次は『社会史論叢(雑纂)』*Mélanges d'histoire sociale* (1942-44)。今度は『年報』だけで『経済・社会・文明』*Annales: Économies, Sociétés, Civilisations* (1946-) という長たらしい副題つき?。「ブロックと私は1929年に、『年報』が生きたものであることを望んだ。生きるとは変化することにほかならない」。リュシアン・フェーヴル、長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』創文社、1977年、所収。
- (29) Bloch, Marc, *La Société féodale*, I: *La Formation des liens de dépendance*, II: *Les Classes et le gouvernement des hommes*, Albin Michel, 1939-40.

=マルク・ブロック、新村猛・森岡敬一郎ほか訳『封建社会』1-2、みすず書房、1973-77年。

- (30) Febvre, Lucien, *Le Problème de l'incroyance au 16^e siècle : la religion de Rabelais*, Albin Michel, 1942. =リュシアン・フェーヴル、高橋薫訳『ラブレールの宗教——16世紀における不信仰の問題』法政大学出版局、2003年。この作品でフェーヴルは「心性的用具」*outillage mental* という用語を使っている。この作品は確かに心性史を創始した名著の一つである。ここでフェーヴルが問題にしているのは、果たしてラブレールは不信仰の徒であったのか、自由思想家であったのか、という問題である。その際、分析用具として彼は「心性的用具」という概念を用いる。それは16世紀のラブレールと同時代人に共有されている「感じ方、考え方」のことである。言い換えれば、それは16世紀人の集合心性であり、認識の枠組み、知の道具立て、概念装置である。フェーヴルは「心性的用具」のありようを16世紀当時の証言、慣用的言語、学術用語の使用例に求める。すると、16世紀のラブレールの時代には「理神論」「懐疑主義」「自由思想家」「合理主義」という言葉がない。「慣用的な言葉も学術的な用語もないということは、思考の欠落を意味する」。「したがって16世紀の人々に不信仰というのはいない、時代錯誤である」。それを表す言語がないのであるから、16世紀を懐疑主義の世紀、自由思想の世紀、合理主義の世紀であるとして称えることは最悪の間違いである。不信仰という概念自体考えられない。それどころかラブレールには「深い信仰心」が見て取れる。——これがフェーヴルの主張の核心である。

彼は「言語」がなければ「思考」がないと考えた。しかし表出的な「言語」がなくても潜在的な「思考」、意識下の「意識」はありうる、という反論が出されるだろう。同時代のモンテーニュの「懐疑」「疑う」がそれである。フェーヴルが案出した「心性的用具」という概念では時代の集合心性は捉えられないためか、この用語は「集合心性」ほどは用いられていない。

ラブレールの文学も、飢渴の時代に「たらふく食らい、たらふく飲んで」生命力を解放させる一つのユートピア文学であり、民衆の笑いや広場の叫び声、祝祭やカーニバルの大騒ぎを活写し、それを当時のニューメディアたる「印刷術」を使って解き放った文学と捉え直されている（バフチン Bakhtine, Mikhail, 川端香男里訳『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』せりか書房、1980年）。

- (31) リュシアン・フェーヴル、長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』創文社、1977年、所収の「マルク・ブロックとストラスブル——或る偉大な歴史の思い出」。
- (32) Lévy-Bruhl, Lucien, *La Mentalité primitive*, Paris, 1922.
- (33) Lukes, Steven, *Emile Durkheim : His Life and Work, A Historical and Critical Study*, Stanford University Press, 1973, Chap.19, pp.379 ff. デュルケムの教育史の講義録は没後刊行された。Durkheim, Émile, *L'Évolution pédagogique en France*, 2 vol., Felix Alcan, 1938. =小関藤一郎訳『フランス教育思想史』行路社、1981年。
- (34) Lukes, *ibid.*, pp.561 ff. に『社会学年報』の詳細な目次が収録されている。ブロックはいう。「私の世代の歴史家たちは、語り尽くせない最高のものを『社会学年報』から得ている」ピーター・パーク、大津真作訳『フランス歴史学革命』岩波書店、1992年、54頁から引用。原文は Bloch, Marc, *Annales*, 1935, p.393. ブロックは、遺著『歴史のための弁明』の注で、デュルケムとヴィダル・ド・ラ・ブラーシュに言及している。「バストゥールは生物学を革新した、しかし彼は生物学者ではなかった。同様に、デュルケムは哲学から社会学に転じた人、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは地理学者である。二人とも「免許」を持った歴史学者としては位置づけられていない。だが彼らは、20世紀初頭の歴史研究に、いかなる専門家よりも、比較にならないほどの深い影響を刻印づけた」(Bloch, Marc, *The Historian's Craft*, Man-

- chester University Press, 1954, 1992, p. 18)。
- (35) Febvre, Lucien, *La Terre et l'évolution humaine : introduction géographique à l'histoire*, Paris, 1922. =リュシアン・フェーヴル、飯塚浩二訳『大地と人類の進化』上、岩波文庫、1971年、田辺裕訳、下、岩波文庫、1972年。
- (36) デュルケムの歴史学に対する見方については、Bloch, Marc, *The Historian's Craft*, Manchester University Press, 1954, Chap. 1, p. 17.
- (37) 前掲、ピーター・バーク、大津真作訳『フランス歴史学革命』15頁。原文はDurkheim, Émile, Préface, *Année sociologique*, vol. 1, 1896.
- (38) キャロル・フィンク、河原温訳『マルク・ブロック——歴史のなかの生涯』平凡社、1994年、48-49頁。原文はSimiand, François, *Méthode historique et science sociale*, *Revue de Synthèse Historique*, 6, 1903. なお「起源のイドラ」についてのマルク・ブロックの言説は、Bloch, Marc, *The Historian's Craft*, pp. 24 ff.
- (39) Bloch, Marc, *Les Rois thaumaturges : étude sur le caractère surnaturel attribué à la puissance royale particulièrement en France et en Angleterre*, Armand Colin, 1961 (éd. orig., 1924). =マルク・ブロック、井上泰男・渡邊昌美訳『王の奇跡——王権の超自然的性格に関する研究／特にフランスとイギリスの場合』刀水書房、1998年。
- (40) マルク・ブロック、邦訳『王の奇跡』第1章、21頁。
- (41) マルク・ブロック、邦訳『王の奇跡』第1章、32頁、41-43頁。
- (42) マルク・ブロック、邦訳『王の奇跡』序論、12頁。
- (43) マルク・ブロック、邦訳『王の奇跡』第5章、403-05頁。
- (44) マルク・ブロック、邦訳『王の奇跡』第5章、424頁。
- (45) マルク・ブロック、邦訳『王の奇跡』第6章、436頁以下、446頁以下。
- (46) ストラスブール大学の同僚、社会心理学者シャルル・ブロンデルの集合心理学の着想は、後期のフェーヴルの著作（『16世紀における不信仰の問題』）に生かされ、また社会学者アルヴェックスの記憶の社会的枠組み（集合的記憶）の研究は、生涯にわたってブロックに深く刻印された。
- (47) デュルケーム、田原音和訳『社会分業論』452-53頁の訳者解説。
- (48) マルク・ブロック、邦訳『王の奇跡』第2章、47、49頁、86頁。
- (49) マルク・ブロック、邦訳『王の奇跡』第2章、50頁。
- (50) マルク・ブロック、邦訳『王の奇跡』第2章、83頁。
- (51) マルク・ブロック、邦訳『王の奇跡』第3編、480-81頁。
- (52) ジャック・ルゴフほか、二宮宏之編訳『歴史・文化・表象』岩波書店、1992年、所収のアンドレ・ビュルギエール Burguière, André (1938-) は、「ヨーロッパ社会の研究における人類学と歴史学」で「マルク・ブロックは「多くの点において、このフォークロアのほうが、いかなる王権論にもまして、王権の呪術性をみごとに表現している」と指摘していますが、ここには、フォークロア研究から真の歴史人類学に至る道筋が鮮やかに示されていると言ってよいでしょう」と述べている。
- (53) 私がマルク・ブロックの『フランス農村史の基本性格』の存在を知ったのは、高橋幸八郎『近代社会成立史論』御茶の水書房、1953年、を通してである。この著書の第2篇に収録されている高橋幸八郎「所謂農奴解放に就いて」は忘れがたい論文である。1959年、見事な邦訳が出された。その翻訳を分担された一人は同学の先輩、服部春彦氏で、当時大学院の学生であった。
- (54) Bloch, Marc, *Les Caractères originaux de l'histoire rurale française*, Oslo : A. Ashehoug & Co., 1931. =マルク・ブロック、河野健二・飯沼二郎訳『フランス農村史の基本性格』創文社、1959年、第2章、58-59頁。
- (55) マルク・ブロック、邦訳『フランス農村心の基

- 本性格』序、9、12頁。
- (56) マルク・ブロック、邦訳『フランス農村史の基本性格』序、8頁。
- (57) マルク・ブロック、邦訳『フランス農村史の基本性格』第2章、59頁以下。
- (58) マルク・ブロック、邦訳『フランス農村史の基本性格』第2章、74頁以下。
- (59) マルク・ブロック、邦訳『フランス農村史の基本性格』第2章、82頁以下。
- (60) マルク・ブロック、邦訳『フランス農村史の基本性格』第2章、90-91頁。
- (61) マルク・ブロック、邦訳『フランス農村史の基本性格』第2章、90-91頁。
- (62) マルク・ブロック、邦訳『フランス農村史の異本性格』第7章、318頁以下。
- (63) Bloch, Marc, *The Historian's Craft*, Manchester University Press, pp. 36 ff.
- (64) マルク・ブロック、邦訳『フランス農村史の基本性格』序、8-9頁。
- (65) Bloch, Marc, *The Historian's Craft*, pp. 38-39.
- (66) ビーター・バーク『フランス歴史学革命』岩波書店、1992年、40頁。
- (67) Bloch, Marc, *The Historian's Craft*, pp. 22.
- (68) マルク・ブロック、邦訳『フランス農村史の基本性格』序、11-12頁。
- (69) Bloch, Marc, *The Historian's Craft*, p. 36.
- (70) 本文との関連で、ここでリュシアン・フェーヴルのいくつかの言葉を引用する。「歴史とは人間を対象とする学問です」(「歴史と歴史家の反省」1933)。「歴史が人間の科学であること、歴史が人間社会の絶えざる変化と物質的・政治的・道徳的・宗教的・知的生活の新しい条件への人間社会の適応を対象とする科学であることを決して忘れてはならない」(「歴史を生きる」1941)。「歴史を研究するためには、決然と過去に背を向け、まず生きなさい。生活に没頭しなさい」(同上)。「人間とはその全活動が交わる場です。社会という語は、人間活動の個別的側面の一つではなく、自らが成員である集団の内部で把握される人間そのものである」(同上)。リュシアン・フェーヴル、長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』創文社、1977年、より。
- (71) Maitland, Frederic William, *Domesday Book and beyond*, Cambridge University Press, 1897. 「ドゥームズデー・ブック」とは、ノルマンディ公ウィリアム(ウィリアム征服王、1066-87)が1066年イングランドを征服したのち、1086年に行った土地調査をいう。beyond「かなた」という語は、その土地調査より前の時代に遡るという意味である。シーボームの著者は、Seebohm, Frederick, *The English Village Community*, 2nd ed., Longmans, Green, 1883.
- (72) Bloch, Marc, *La Société féodale*, I : *La Formation des liens de dépendance*, A. Michel, 1939 ; *La Société féodale*, II : *Les Classes et le gouvernement des hommes*, A. Michel, 1940. =マルク・ブロック、新村猛・森岡敬一郎・大高順雄・神沢栄三訳『封建社会』1、2、みすず書房、1973、1977年。本稿はほぼこの訳書によっている。邦訳には、マルク・ブロック、堀末庸三監訳、石川武ほか訳『封建社会』岩波書店、1995年、もある。英語版Bloch, Marc, *Feudal Society*, translated by L. A. Manyon, Routledge & Kegan Paul, 1961. この英語版が出た1961年、私は一夏かかってこの本と格闘したことがある。とうてい歯が立たず、大学の夏休み一杯かけて読んだ頁数がたったの20頁にすぎなかった。そんな苦い思い出がある。
- (73) リュシアン・フェーヴル、長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』創文社、1977年、所収の「マルク・ブロックとストラスブル—或る偉大な歴史の思い出」より。
- (74) Pirenne, Henri, *Mahomet et Charlemagne*, Paris et Bruxelles, 1937. =アンリ・ピレンヌ、増田四郎監修、中村宏・佐々木克巳訳『ヨーロッパ世界の誕生—マホメットとシャルルマーニュ』創文社、1960年。ピレンヌはいう。—ゲルマン民族の侵入はローマ文化の本質的特徴に終止符を打つものではなかった。古代の伝統の断絶をもた

らしたものは、思いがけなくも、イスラムの急激な侵入によるものであった。この侵入が「われらの海」mare nostrumの地中海を引き裂き、地中海の統一世界に終止符を打つ結果となった。ここに史上初めて、歴史生活の中軸が地中海から北ヨーロッパに移動した。800年に新しいフランク帝国が建設されてこの動向は完成した、と（同上訳書、408-09頁）。

- (75) Durkheim, Émile, *De la division du travail social: Étude sur l'organisation des sociétés supérieures*, Alcan, 1893. =デュルケーム、田原音和訳『社会分業論』青木書店、1971年。この訳書から、デュルケームの社会的凝集についての用例をいくつか引用しておく。「じっさいに社会的凝集は存在する。集団の全成員が互いに類似しているからこそ相互に個人的に惹きあうばかりでなく、同じように、全成員が自分たちの結合によって構成する社会にも結びつけられているのである」(103頁)。「共同意識がその作用を感じさせるさまざまの関係が多ければ多いほど、この意識は個人を集団に結びつける紐帯をより多くつくり出す。その結果、社会的凝集はいっそう完全にこの原因から生じてきて、明瞭なしをもつにいたる」(106頁)。「社会の凝集が分業という結果を生ずるとすれば、それはこの凝集が社会内の関係を増加させるからである」(252頁)。「分業は社会的凝集の源泉である」(379頁)。
- (76) マルク・ブロック、新村猛ほか訳『封建社会』1のサブタイトルが「従属の紐帯の形成」である。「封建制は最後の蛮族の猛攻という環境において決定的な姿をとるようになった」(『封建社会』2、156頁)。「蛮族の侵入は破壊的であっただけではない。混乱そのものの中から西ヨーロッパの内部に力関係における深刻なある種の変化が生じた」(『封建社会』1、44頁)。侵入という外的環境の変化に対して、力関係が内部に向かって変化した。これが社会的凝集力にほかならない。ここにブロックの社会学的視点を見てとることができる。
- (77) マルク・ブロック、新村猛ほか訳『封建社会』1、57頁。ブロックは、封建制 féodalité と呼ばれる社会の特徴を「人格的保護と従属の紐帯の諸関係」であると捉える（新村猛ほか訳『封建社会』1、130頁）。また「封建社会」に特有の人間の紐帯は、すぐ身近な首長＝主君（複数もありうる）に対する従属の紐帯であり、「封建社会」société féodale とは、このように一段一段と形成された結び目が、最も卑賤な者を最も有力な者に無限に分岐した鎖でつながるように結びつけていた、人格的保護＝従属の紐帯の社会であると規定する（新村猛ほか訳『封建社会』2、157頁）。人間と人間の紐帯から社会結合を捉えるブロックの「封建社会」の規定は、きわめて社会学的である。
- (78) マルク・ブロック、新村猛ほか訳『封建社会』1、第2章「感じ方と考え方」70頁以下。
- (79) たとえば、ジャック・ル・ゴフ、新倉俊一訳「教会の時間と商人の時間」『思想』663号、1979年。教会の時間を表しているのが教会の鐘（クロージュ）であり、世俗の時間を表しているのが市庁舎の大時計（オルロージュ）である。中世末に教会と商人の二つの社会階層が「時間の支配」をめぐる争った。教会の鐘の出現という些細に見える事象の背後に社会階層間の対立を見出すのは「社会学的」な視点であるが、この論文でル・ゴフは、いかにして商人階層が社会的に共通な「尺度」を支配し、自分のものにしていったかを問い、尺度をめぐる「支配の社会学」を展開している。
- (80) マルク・ブロック、新村猛ほか訳『封建社会』1、71-72頁、77-83頁。
- (81) マルク・ブロック、新村猛ほか訳『封建社会』1、第3章「集合的記憶」84頁以下。
- (82) ピーター・バーク、大津真作訳『フランス歴史学革命』42頁。
- (83) Halbwachs, Maurice, *Les Cardres sociaux de la memoire*, F. Alcan, 1925. ならびに Halbwachs, Maurice, *La Memoire collective*, PUF, 1950. =モーリス・アルヴァクス、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年。アルヴァクスは1919年から35年までストラスブール大学で初め教育学、のち

社会学を講じた。その後パリ大学に転じ、1943年
コレージュ・ド・フランス教授となった。1944年
7月ゲシュタポに逮捕され、翌45年2月ブッフ
ェンヴァルトの収容所で非業の死を遂げた。

- (84) マルク・ブロック、新村猛ほか訳『封建社会』
2、「社会類型としての封建制」「ヨーロッパ封建制
の延長」154頁以下。邦訳書では「社会形態として
の封建制」と訳されているが、適切ではない。こ
こではデュルケムの用語法にしたがって「社会類
型」とした。
- (85) デュルケム、宮島喬訳『社会学的方法の規準』
岩波文庫、1978年、239-40頁。
- (86) デュルケム、田原音和訳『社会分業論』青木
書店、1971年、367頁。
- (87) 同上。
- (88) マルク・ブロック、新村猛ほか訳『封建社会』
2、160-61頁。
- (89) マルク・ブロックの参照した日本の封建制につ
いての文献は、Asakawa, K., *The Origin of Feudal Land-Tenure in Japan*, *American Historical Review*, 30, 1915, Fukuda, Tokuzo, *Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwicklung in Japan*, Stuttgart, 1900, などである。後者の邦訳が、福田
徳三『日本経済史論』宝文館、1907年。
- (90) マルク・ブロック、新村猛ほか訳『封建社会』
2、160頁。
- (91) マルク・ブロック、新村猛ほか訳『封建社会』
2、164-65頁。
- (92) マルク・ブロック、新村猛ほか訳『封建社会』
2、165頁。
- (93) リュシアン・フェーヴルはブロックの最後を次
のように書いている。——マルク・ブロックは抵
抗運動に飛び込んだ。活動の拠点は生まれ故郷の
リヨン。1944年春、ゲシュタポが数カ月の努力の
末に「レジスタンス統一戦線」リヨン地方委員会
に手をかけた。ブロックは逮捕され、叩きのめさ
れ、拷問にかけられた。ソルボンヌの教授だった
ブロックは、獄中で囚人たちにフランスの歴史と
未来を語った。1944年6月16日、モンリュックの

独房から出された27名のフランスの愛国者は、リ
ヨンの北約25キロ、通称レ・ルーシュの野原に連
行された。アルトマン Altman, Georges が『政治
手帖』*Les Cahiers politiques* (1945) の感動的な記
事の中で、こう書いている。——「彼の近くで16
歳の少年が震えていた。「あれは痛いでしょうか」。
マルク・ブロックは少年の腕をとって言った。「い
や、痛くないよ」そして彼は「フランス万歳！」
と叫んで一番目に倒れた」。ヨーロッパの最も偉大
な精神の一人が、ドイツ兵の銃弾に倒れた。偉大
なフランス人が死んだ。われわれは彼の死を無駄
にしてはならない。リュシアン・フェーヴル、長
谷川輝夫訳『歴史のための闘い』創文社、1977年、
所収の「マルク・ブロックとストラスブル——
或る偉大な歴史の思い出」より。キャロル・フィ
ンク、河原温訳『マルク・ブロック——歴史のな
かの生涯』平凡社、301頁以下、385頁。